

第6回 「日本語大賞」

テーマ

^{いま} ^{つた} ^{ことば}
「今、伝えたい言葉」



小学生の部 優秀賞 受賞作品

ありがとう、楽しんでるよ。

神奈川県

湘南ゼミナール中川教室

小学6年 鈴木 航

ありがとう、楽しんでるよ。

神奈川県 湘南ゼミナール中川教室 小学六年 鈴木 航（すずき・わたる）

今年も夏休みが来た！ ぼくには小学校最後の夏休み、自分から区の水泳大会に出た。楽しかった。去年とは違うぼくがここにいる。

五年生の夏休み。ぼくはスイミングをやめようと思った。もうバタフライの進級は無理だと思ったからだ。ぼくはそれまで一年間、ずっとバタフライに苦労してた。だから「今月は、絶対進級してやる。」と思っていた。

スイミングを始めたのは、お母さんがぼくの健康・体力作りに良いと聞き、始めた。それから6年通い続け、特に早くないけど、進級していき、やっとバタフライまで来た。しかしそれから一年が経つ。正直、もういい、バタフライはもういやだ。八月の集中六日間で最後にする。集中でもぼくは毎日がんばった。三・四日目は、合格者が出てきた。五日目、喜んでいる人をたくさん見た。六日目、合格者の泳ぎを応援した。悲しかった。

「もうバタフライはやだ。スイミング、もうやめたい。」とぼくが家で嘆いていると、「そう。よくがんばったものね。他の泳ぎができるのだから、バタフライができなくても大丈夫よ。」とお母さんが言ってくれた。しばらくだまって考えて「ぼく後悔するかも。」と言うとお母さんが「もし後悔すると思うなら、追加授業申込んでもいいわよ。」そしてまた、ぼくは考えた。やだ。やりたくない。という気持ちでいっぱいになった。でももし、ここでやめたら後で後悔するぼくも浮かんできた。「ぼくやるよ、追加授業とって。でもこれでだめならぼくもうやめる。」半分涙声のぼくに、「できるよ。次はきつと合格だよ。がんばって。」弟もはげましてくれた。ぼくは下を向いて、歯をくいしばっていた。

八月下旬の六日間。合格する、必ず。ぼくは一日一日、前より意識してコーチの声を聞き、そのとおりにやったつもりだ。でもまだできなかった。「手を開きすぎ」「速く」分かっていてもできない。家族も見に来てくれた。コーチも追加授業のぼくを熱心に教えて下さった。三日目、コーチからの電話「航くんもう少しです。明日は息つきを、二回に一回にしてみましよう。」四日目、意識しながら、ひたすら泳いだ。五日目、やっと合格の紙をもらった。涙があふれるほどうれしかった。

こんなに苦しんだ進級はなかった。何となくやってきた今までとは違う達成感があった。できた。無理と思っていたことができた。

ぼくは去年の夏のスイミングで「自信」という言葉の意味が初めて分かった気がした。自分を信じてがんばると、感じる気持ち。強い気持ちなのだと思った。応援してくれた、家族やコーチ、そして涙をながしながらもがんばった去年のぼくに、「ありがとう。今もスイミング楽しんでるよ。」と伝えたい。